ウルトラトレイル・マウントフジ 2020　全体説明会議事録

日時　：2019 年 10 月 8 日（火）15 時 00 分～17 時 00 分
会場　：富士河口湖町役場　中央公民館　2 階　視聴覚室
議題　1、UTMF2020 大会運営計画説明　(大会概要、コース等)
　　2、質疑応答
　　3、その他

出席者一覧

No	所属	所属・部署	氏名
1	環境省富士五湖管理官事務所		斎藤天道様
2	環境省沼津管理官事務所		成田智史様
3	静岡県くらし・環境部環境局　自然保護課		山上達也様
4	山梨県森林環境部　みどり自然課		前島みどり様
5	山梨県峡南林務環境事務所		中桐秀晴様
6	山梨県富士東部林務環境事務所		天野雅章様
7	富士山エコレンジャー		小島正様
8			吉永耕一様
9	富士吉田警察署　交通課		星野勲様
10	河口湖消防署		堀内松美様
11	特定非営利活動法人富士山クラブ　事務局長		青木直子様
12	日本野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部		渡邉修治様
13	環境省　希少野生動植物種保存推進員		半場良一様
14	富士トレイルランナーズ倶楽部　代表理事 ウルトラトレイル・マウントフジ　実行委員長		鏑木毅
15	富士トレイルランナーズ倶楽部　理事 ウルトラトレイル・マウントフジ　副実行委員長		福田六花
16	富士トレイルランナーズ倶楽部　理事 ウルトラトレイル・マウントフジ　実行委員		三浦務
17	ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会事務局長		千葉達雄
18	ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会事務局		神谷知里
19	ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会事務局		秋本康晴
20	ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会事務局		高嶋宣秀
21	ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会事務局		鈴木雅子
22	ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会事務局		倉原卓也
23	ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会事務局		鈴木磨美
24	富士市	教育委員会　スポーツ振興課	市川洋介
25	富士宮市	教育委員会　スポーツ振興課	山田知生
26		教育委員会　スポーツ振興課	高橋賢太
27	身延町	企画政策課	内藤伸一
28	富士河口湖町	生涯学習課	北川浩正
29	富士吉田市	生涯学習課	川野竜洋
30	御殿場市	2020オリンピックパラリンピック課	金子泰郎
31		富士山ツーリズム御殿場実行委員会	関谷正太郎
	出席者　理事：3名　事務局：7名　6市町村：8名　各団体：13名　合計：31名		

＜事務局長　千葉＞
「ウルトラトレイルマウントフジ 2020 全体説明会を開催させていただきます。まず初めに鏑木の方からご挨拶させていただきます。」

＜実行委員長　鏑木＞
「皆様こんにちは。準備期間が短い中、お忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。この 4 月に第 7 回目の大会が終わったわけですけども、非常に悪天候に見舞われまして、途中季節外れの大雪に見舞われました。その結果短縮開催ということで終わりました。この夏も大変悪天候、台風であったり、この週末も大きな台風が来るということを聞いております。非常に地球規模で気候変動が激しい中我々アウトドアスポーツを行なっているものに対して今後非常に心配事が多いと思っております。　ただ、この中でも春の大会 UTMF は大きな事故もなく終えることができました。長時間に渡るレースなので何よりも世界中から集まる選手たち、一番に大切にしたいのは安全ですね。皆さんがしっかりと無事に故郷に帰ってもらうことが重要なことなのかなという意味でも我々もしっかりと気を引き締めていかないといけないなと思っております。来年、東京オリンピックがございます。東京オリンピックが終わりますと非常にスポーツに対する考え方、価値観が国単位で変わると思います。今までは競技志向の強いものでしたけども、私も都庁の人間とも話をしたなかで、今後地域振興とスポーツというものがオリンピック以降非常にクローズアップされるという流れが来るという形になると言われております。その中でウルトラトレイルマウントフジが両県を跨ぐ地域振興としても大きな役割を果たしていきたいなと思っております。来年度ゴール会場が変更になります。それに伴ってコースも一部変更になります。その辺の変更もあります。ぜひ忌憚のないご意見を賜りまして来年大会を開催できればと思っております。本日はよろしくお願いいたします。」

1、UTMF2020 大会運営計画説明　(大会概要、コース等)
＜事務局長　千葉＞
(運営計画書に沿ってご説明)

【大会概要】
○ウルトラトレイルマウントフジ 2020 は、今回 8 回目の開催。
○開催日：2020 年 4 月 24 日金曜日から 26 日日曜日までの 3 日間。
○エントリー期間：国内在住者海外在住者とも抽選制で 10 月 16 日から 22 日まで募集を行い、抽選・資格審査を行い、11 月 19 日に抽選結果を発表し、12 月 3 日にはおおよその参加者が判明する。
○競技種目：ウルトラマウントフジ 1 種目のみ。
○距離：161km、本年の大会に比べまして 4km 距離が短くなる。
○累積標高：7580m と本年に比べてやや少なくなる。
○スタート時刻：12 時から午後 3 時、15 時に変更。そしてウェーブスタートという、参加者を 2 つのグループに分け、2 回 30 分間隔で 2 度スタートさせるというウェーブスタート方式を初めて今回実施する。
　ウェーブスタートにした理由は、本年、初めて 2400 名が一斉にスタートしたことで、主に東京電力さんの送電線下で渋滞が発生したという反省があり、踏み外しのリスクもあることから初めてグループを分けて渋滞の緩和、トレイルの踏み外しがないことを目的として採用。
○参加者数：2400 名。
○参加費：一般 36000 円、寄付エントリー100,000 円、寄付エントリーは環境事業を目的とした寄付金とさせていただく。

○開催場所：静岡県富士市、富士宮市、身延町、鳴沢村、富士河口湖町、富士吉田市、忍野村で開催を行います。
○スタート会場：富士市の富士山子どもの国、フィニッシュ会場は大池公園から同じ富士河口湖町の河口湖総合公園に場所を変更。
　大きな理由としては、大池公園は一般の方が利用する公園で開催をしてきて、非常にいいロケーションであったわが、我々のお客さんが増えているということや出展者も増えていることでキャパシティが足りなくなっているという課題が常にあり、これ以上お客さんが来てしまうとキャパオーバーになってしまうということで、駐車場の余裕や会場の余裕がある河口湖総合公園に変更するという結論。
○主催：ウルトラマウンフジ実行委員会で、構成員の変更なし。
○後援：記載の通り予定。
○参加資格：エントリーに対して、国際トレイルランニング協会が認定するレースにポイントがつくが、そのポイントを 12 ポイントから 10 ポイントに減らしている。ランナーの方々にとっては大きな資格の変更。

【イベント・その他】
○UTMF エキスポ：トレイルランニングやアウトドア関連の出展がトレイルランニングの世界では日本最大級の規模で本年もスタート会場の冨士山こどもの国、そしてフィニッシュ会場の富士河口湖総合公園で行います。
○マルシェ：地元グルメ等を提供して地域の食を知っていただくという目的で例年通りの開催と考えている。
○湯巡りスタンプラリー：例年どおり開催する予定となっており、こちらは大会時だけではなく、試走時や大会以外でも来ていただいた時に立ち寄り湯を利用してトレイルランニングの方々に大会以外にも来訪を促すことを目的としたスタンプラリー。こちらは来年の 1 月中旬から 4 月末までで記載どおり予定。
○応援用サポートバス、駐車場送迎バス、ツアー・宿泊：フィニッシュ会場も変わったことで詳細をつめているが、予定通り行う。

【大会日程】
○4 月 23 日(木)12 時から 8 時まで河口湖総合公園内でナンバーカードの引き換え、必携品チェック。4 月 23 日に御殿場市内で必携品チェックのみ例年と同じように行う。
○4 月 24 日(金)8 時に会場をオープン、13 時 30 分までナンバーカード引き換え、必携品チェック。
14 時 30 分に開会式を行い、15 時に第 1 ウェーブがスタートし、15 時 30 分に第 2 ウェーブがスタート。こちらは基本的には国際トレイルランニング協会が発行している選手の強さを数値化したものでパフォーマンスインデックスというものがあり、それで速いもの順に並べるようなかたちで半分ずつ分けるので、基本的には第 2 ウェーブの方が第 1 ウェーブの方を追い抜くような混雑は想定はせずにスムーズにいくと考えている。
今回スタート時間を 3 時間遅らせたことで、スタート会場にいる滞留時間が長くなり、地域の PR 時間が増やすことができるのではないかと期待。
○4 月 26 日(日)こちらも少し遅れ、13 時から 13 時 30 分で表彰式を行い、表彰式をやっている中で 13 時 30 分に制限時間がやってくるというような 46 時間のレース。

【コースについて】
○コース順で静岡県と山梨県にまたがる A2 と A3 のあいだに竜が岳という山があるが、今回コースとして利用しないことにした。理由としては、本年天候の読みが外れたことでレースで利用した時にコースの荒れが出たということがあり、ちょっとした雨でも非常にぬ

かるみやすい山であるということ。2020 年は初めからそこのコースをショートカットするというところが 1 つの大きな変更点。
○フィニッシュ会場変更に伴って最後の A9 からの霜山の下り口からフィニッシュ会場変更となる。

【競技規則】
基本的には装備品を必ずチェックしてうえで開催をし、自然保護のルールをしっかりと設けて啓発しながら変わらず進めてやっていくことには変更はない。
競技規則をエントリー前にしっかりと読めるようにし、承諾した方のみがレースにエントリーができるというようなかたちになっている。

【安全管理体制】
○大前提として全コースの調査は当然行って、コースの安全を確かめた上で開催をしていく。一部整備ができていない部分もあるが例年 12 月頃から山の方もチェックをして、我々以外ではなかなか整備ができないところに関しては　ボランティアさんのご協力のもと整備を行うかたちでコースの安全を確かめた上で開催。
○16 ページ：①から⑦に関して、土壌のぬかるみによる歩道への影響、出水が予想される沢に関しては 3 日前までにコースの変更をする。これも例年通りのタイミングになっており、もう少し短ければ短いほど天候の判断はしやすいところはあるが、スタッフの配置や選手へのコース変更の告知、やはり 3 日前というのが現状で最短になるだろうということで例年通りの 3 日前までとしている。
○17 ページ：エイドステーション、救護体制は、例年通りすべてのエイドの箇所で医師、もしくは救護スタッフが必ずいるように安全管理体制を敷いている。通過人数、行方不明者特定に関しては、選手全てに計測チップをつけてエイドの少なくても 1 箇所で通過管理をして行方不明者がないかの確認をしていく。そして医療に関しては予想される体調不良の対応法もしっかりと準備した上で医師の指示のもと大会運営を行っていこうと考えており、各エイド以外にも大会本部にもドクターもおりまして色々ご判断を仰ぎながら進めていく。
○19 ページ～20 ページ：「自然環境に配慮した持続可能な大会運営のために」、これは大会としても非常に重視をしていることで行動範囲、及び配慮事項を設けており、これにのっとって運営をしている。その上で大きな部分というのがモニタリング。我々は環境省の「国立公園内で開催されるトレイルランニング大会等におけるモニタリングの手引き」にのっとり、環境影響モニタリングと利用モニタリングの 2 種類を実施をしている。基本的には何年か同じものをやって、どのようになったかというのを見たいということもあり、1 回問題がないから調査しなくていいということではなく、全部同じ場所を毎年モニタリングをして経過した中で気づいたことがあるかと思うので、行っていくということと、環境影響モニタリングに関しては歩道部分の形状の改変の有無と歩道からのはみ出し。はみ出したことによって植生を踏んでしまってはいないかというところの消失の変化検証を目的としている。
利用モニタリングに関しては、大会をやったときにどうしても観光地が含まれているところでやっているので、ランナーと一緒に通過地点にほかのハイカーさんや一般の利用客の方々からの声を聞いて実際にご迷惑になったことがなかったか、もともと大会を認知できていたかというようなところを聴くということを目的にやっている。
○22 ページ：調査日程が載っているのでご確認していただければと思う。

～質疑応答～

＜富士山エコレンジャー　吉永　様＞
「今モニタリング方法をご説明ただいたんですけども、環境省さんのモニタリングの手引きに基づいてやるということで、2018 はなかったと思うんですが、今年 2019 長者ヶ岳で土壌硬度の調査を 3 箇所されましたね。また今回は 5 箇所土壌硬度の調査をやられると。このご説明いただいた中で見ますとまさしく、直線を 3 本引いて 20cm 間隔でやられるということなんですが、この土壌高度の測定の目的というのは何なのかっていうのを。千葉さんは確か環境の担当をやっておられますね、僕も若干土壌硬度調査をやりましたけども大変手間がかかる。三側線で 20cm 間隔で全部やるわけでしょ、レース後に。それをやるということならそれなりの理由が必要であって、やるなという、そういう話ではないんですよ。どういう風にモニタリングでつかまえられた土壌高度をご利用になられるのか、それをちょっと教えて欲しいんです。」

＜事務局長　千葉＞
「硬度計で硬度を測っていくんですけども、事前と事後でどれくらい硬くなったかというのを見て、非常にわかりやすく言うと硬くなりすぎると植物が生えなくなってしまう裸地化が進むという考え方があってそこが一定以上超えてしまっていると、仮に踏み外しがあってさらに土壌硬度がかなり硬くなってしまうと植物が生えなくなってしまうという考え方で、裸地化してどんどん広がってしまうというところで、そこを見るということをやっていますが、硬度は天候にも左右されるので、なかなか有用な形で、実際基準はあるんですけどフォーカスされたことはないですが、一応やっています。」

＜富士山エコレンジャー　吉永　様＞
「まずものすごく基本的な疑問というか教えていただきたいのだけども、道が裸地化しても大きな問題じゃないと思っているし、皆さんも改修、補修されたあとは踏み固める。それはその通りだと思っていて、今おっしゃった裸地化というのがもし考えられるんだったら、それはきっと測線で、両脇部分でしょ。両脇部分を踏み込んで、それによって土壌硬度が固まって裸地化するって、こんなのきっとないよ。皆さんも事実上わかってる。これを調べるのは目視でここは踏んでるかどうか、だと思うんですよ。千葉さんは環境担当だからわかっておられると思うんだけど、今まで皆さんがこの UTMF で測られて公表されている、どれだけ硬くなるかっていう、土壌の硬化っていうのを見ても、全然下の方。下の方で、土壌硬度で問題になるのは柔らかいところを、脆弱なところを、柔らかいということは土壌硬度が低いところをコースに設定してしまうと表面が荒れたり、表面が荒れて歩きづらくなるとそこをみんな避けるから植生を痛める。それからもう 1 つ、日本の場合の特筆として雨が降るでしょう。温帯モンスーンだから。そうするとあと侵食が起きるわけです。それがかなり歩道の保全をやっている人たちがいるわけだから、労力になるんだから、可能な限り少なくしていきたいというふうに僕は思っているんですけども、ずっと皆さんと一緒に最初の大会から調査も含めてやってきて、皆さんのいいのは意見交換会の場を設けてくださって、僕らみたいのが学識があって言ってるわけでもないし、ただ環境パトロールの経験だけで言っているだけの意見もちゃんと聞いてくださって対応もそれなりにやってくれることが多い中で、ぶっちゃけた話、土壌硬度が高くなるから裸地化になる、そういったのを僕が初めて見たのは第 1 回大会の環境報告の土壌硬度の評価の中なんですよ。それまでそんなことを言う人はおらんかった。そんなこと知らなかったんだけど、これはね、僕はかなり見直しをしていかないと、みんなは目視で裸地化って分かると思っていて、それから道の真ん中は硬い方がいいと思ってて、なにを言いたいかというとたくさんの労力をかけるくらいだったら、もっと長い距離を見て回ってもらってどこが荒廃が起きやすいか、それを捕まえていただくと、それが次に生きてくるわけですよ。次に

より環境に負荷のかからない大会ができると思うんですよ。そういう意味でちょっと長くなったからあれだけど、土壌高度の測定についてぜひ見直しを検討していただきたい。短時間でどうだこうだとは言いませんよ。ちゃんと時間かけて検討していただいて、調査をやったことがちゃんと次に生かせるようにしていって欲しい。折角やるんだから、環境調査を大切にして欲しい。
それからもう 1 点。それに絡んでくるんだけど、例えば熊森山みたいな雨が降ったら色々あるのは前から言っているけども、だいぶ実現をしてくださったんですけども、ビデオで全コース、その区間ですよ、その区間をちゃんと撮って欲しい。レース前とレース後。それを見比べると、レースによって起きた荒廃なのか、レース以外のもともとある荒廃なのかまず区別がつく。レースによっておきる荒廃であればその対応策を考えていけばいいし、事前に決めた場所に荒廃が起きると分かっていればいいんだけど、わからんのですよ。僕らも 2010 年からずっとやっていて、結果として起きるところは起きてるですよ。だから全コースとは言わんよ。全周とは言わんよ。今問題になっている箇所ね。ここは雨が降ったらどうだっていう。そこについては前にお話しした時にゴープロさんもサポートしてくれてるとかのお話もあったし、すごく安定して現場を撮っていけるわけですよ。そしたら 1 秒間に 60 枚の写真を撮っているのと同じ量の写真が撮れるわけですよ。僕たちが須山口で調査したときにはそれを解析して、いったい全体どういう種類のどういう荒廃が起きているのかっていうのがそのビデオによってだいたい掴めてきたわけですよ。須山口の一番の根本的な問題は路体が弱い。側火山のところを使っているから潰れやすいとかそういうのがわかるわけですよ。是非何度も行って、須山口や他の場所でもビデオ撮影やってくださってなんか大変だっていう。だから、限ってたくさんするのが大変であれば、そういうのも是非検討してください。よろしくお願いします。」

＜事務局長　千葉＞
「はい。ありがとうございます。ちょっと実際作業がかかることなので即答できかねますので、検討はさせていただきます。」

＜実行委員長　鏑木＞
「吉永さんおっしゃるとおり、次に活かせる報告というのは大切だと思っていますので良い意見をいただいたなと思います。検討していきたいと思います。」

＜富士山エコレンジャー　吉永　様＞
「よろしくお願いします。」

＜事務局長　千葉＞
「土壌硬度に関しては平成 29 年に環境省の国立公園課さんから発表されて以降から改定というか、そこからアップデートというか、私が知る限りないので、もしよろしければそういう声もあったというのを是非お伝えいただければ。最近はこういうモニタリングがどうだっていうのことを揉む会というのが実際ない、少なくとも我々協会とかも入っていますけどもないですよね。環境省さんとモニタリングをもっとこうしようというのはないと思うんで、もしよろしければそういう声も検討会でありましたということをお伝えいただけると我々もありがたいなと思います。」

＜環境省　富士五湖管理官事務所　斎藤　様＞
「踏み固めているかどうかの仕様として見た目とかも、例えばぬかるみ具合いとかもわからない部分があると思うので、数値的にわかる部分で土壌硬度がわかりやすんじゃないかということで手引きに書いてある部分もあるで、現実的にそういう側面もあるといいますか、実際に目視でもいいではないかいう話が出てきたというのは、そういう検討の段階で

は手広くしていこうかなとは思います。」

＜山梨県狭南林務環境事務所　中桐　様＞
「ちょっと細かいところなんですけど、さっきの土壌硬度のやつですけど、土壌硬度を測るのは土のところである程度湿り気が限界を超えるとまた水が土から壊れて出てきちゃう。それで、ぬかるみが柔らかうなっちゃうんですよ。そいうのの指標にしているのかなと思うんですから。普通だったらある程度硬いところが、たくさん踏み固めが限界を超えると場所によっては中に入っていた結合していた水が自由水になっちゃうとぐちゃぐちゃになる場合があるじゃないですか。今まで硬かったのに、いっぱい走るとぬかるんじゃったみたいな。それで、逆に土壌硬度が下がっちゃってるよっていうのが出てくるかなと思っていたんですけど。そういう意味ではなかったんでしょうか。」

＜事務局長　千葉＞
「私の認識が違うかもしれませんが、どちらかというと裸地化する、硬くなりすぎないかというところだったと私は認識していたので、逆にその認識は勉強になりました。そうですね、確かに。ありがとうございます。なるほど。」

＜富士山エコレンジャー　吉永　様＞
「千葉さん、自分たちの調査報告書をもうちょっと読んでごらん。土壌硬度が下がっている部分結構あるじゃん。なんでだろうかって、考えないと先に活かせないよ。」

【コースについて】
＜事務局長　千葉＞
(コースマップに沿ってご説明)
○1 ページ：ちょうど中心になっているところが静岡県富士市富士山こどもの国で、富士山こどもの国の駐車場をスタートし、そのまま林道に入る。
○2 ページ：W 粟倉で選手は給水とトイレして道路横断となる。富士山スカイラインにつながる道では、本年ここが非常に濃霧が発生し、結果として車両の交通の妨げになってご迷惑をかけたということがあるので、こちらに関しては重点的に警備の方を強化して、車両の通行と選手の通過をスムーズにできるようにしたいと思っている。そこが大きなところとしてウェーブスタート、2 つに分けてレースを開催するということがあるので、ここは競技運営面で改善を重点的に行っていきたい。
○3 ページ：直線のようなかたちで続いてる東京電力の送電線のトレイルを走っていくコース。このまま真っ直ぐ行き A1 富士宮の大原学園富士宮市リガークラブというところの敷地をお借りしてエイドとしている。そのまま富士宮市の上井手の市街地の方に出て、雨天だった場合のみ、赤い「う回路 1」、こちらは安全管理体制のページの迂回コースの①に記載してある天神山自然観察の森という静岡県の管理されている公園になるが、雨天の場合は一応迂回する可能性も考慮しながらコース設定をしている。そのまま矢印方向に向かうと天子山地の方に進む。
○4 ページ：ここからが雨天のときの迂回路やモニタリング調査の場所が出てくる。ここのページで記載されている赤い点線部分、これが安全管理体制の 3 日前に判断する、迂回をした場合のコース取りとなっている。ほとんどが舗装道路を走ることになり、天子山地を迂回して北上していくという迂回路になっている。天候に問題がない場合は、青い方で進み、天子山地をまず天子ヶ岳 1330m のところに行き、ここが例年のモニタリング調査となっているので、この黄色いラインの範囲で 5 箇所モニタリングを行ない、それぞれそのまま長者ヶ岳、山の名前がないがモニタリング調査のエリア 3 の初めのところが熊森山になるので、熊森山の頂上から下るところに関してそれぞれ黄色いエリアの中で 5 箇所ずつモニタリング調査を行う予定。こちらは例年通りで変更はありません。そのまま赤いライン

を、モニタリング調査エリア 3 の熊森山の黄色いラインが終わるところからは舗装道路になり、そのまま青い線に入っていただく。
○5 ページ：A2 の麓という 2 番目のエイドがある。天候に問題がなければこのまま東海自然歩道に向かい、A 沢貯水池を経由し、端足峠に向かう。雨だった場合は A2 の麓から 4 ページの方に戻り、国道 139 号線に出る。これは例年通りだが、付近でこの場所でしか信号がある横断歩道がないので、あえてこちらに戻って、雨天だった場合は信号を守っていただいて、赤だったら選手が停まって青の時だけ横断するという交通規則を守って進めさせていただくということを考えている。
5 ページの迂回路に関しては 139 号線を上がっていき、最後に再び A 沢貯水池の方で既存のコースとぶつかり、139 号線の横断がもう 1 度かかるが、これは船原地区にある 139 号線の陸橋で横断するので安全に国道 139 号線を通過できると考えている。そして A 沢貯水池から端足峠までモニタリング調査の 4 番目ということで本年と同じように進めていきたいと考えている。
○6 ページ：コースの変更がある。2019 年大会は端足峠から東側に行った竜ヶ岳のピークを越えてちょっと下っていった本栖湖畔の道路を通って A3 本栖湖に行くというコースになっていたが、非常に雨天に弱い山で、我々も何度も迂回をしたことがあった。本年、1 日前も見てやってはいたが天候の予測は外れてしまい、結果として整備を要する状況があったことと、下りたところ本栖湖湖畔の道路に関して非常に急なところを通っていて、雨天だと落石の危険もあるというような指摘もあり、非常にリスクが高いため、非常に景観がいい素晴らしいところではあったが、今回端足峠からそのまま本栖湖に方にまわるコース自体を変更するという判断をさせていただいた。コースでいうと大きな変更点の 1 つ。そのまま本栖湖の 3 つ目のエイドに入っていただいたら、そのままぐるっと本栖湖の周辺をまわっていただき、東海自然歩道に入って、精進湖に向かって行く。こちらも雨天だった場合は本栖湖畔の道路を通り、中之倉トンネルから迂回を行う迂回路 4 となっている。
続いて、精進湖エイドの先から黄色のエリア 6 というのが一部青木ヶ原樹海が入っているのでモニタリング調査を例年通り行い、このまま国道 139 号線で道路で鳴沢氷穴の方に入っていく。
○7 ページ：そのまま東海道自然歩道の足和田山の方に入って行くコースだが、こちらは最後のモニタリング調査エリア 7、8 ということで例年通り 2 箇所で行うが、 モニタリング調査のエリア 8 のところで市街地に出る道を変更している。こちらの方が運営しやすいだろうと変更させていただいて、道の駅勝山の前の横断がなくなり、勝山の方へ移動する。
今回フィニッシュ会場が河口湖総合公園になるので今の現状のコースは変わらないが、この地図の 7 ページ目で距離にすると約 700m ぐらいコースが交錯して、すれ違うコースが発生する。矢印に沿って東側の道が富士山世界遺産センターの方にそのまま行くという道、北側の道は帰りにフィニッシュ会場に行くのに使う道となる。
○8 ページ：浅間神社の周辺は東海自然歩道どおりに通っていたが、非常に東海自然歩道が富士浅間神社付近で入り組んでいてわかりづらいというご指摘をいただき、非常にシンプルに国道をできるだけ走って、かくっと曲がるだけの運営がしやすいようコースに変更させていただいた。鳥居地峠を通り、忍野村エイドに入って行き、、内野地区を抜けて東海自然歩道を経由し、
○9 ページ：山中湖村の方に入っていく。大平山に関しては、頂上までは普通の歩道とは別に軽自動車ぐらいが入れる作業道がもう 1 本あるが、こちらの方を使わせていただいて、大平山の方へ一回まわして山中湖の方に下っていくようなかたちで考えている。そのまま山中湖の方に入り明神山の方に入っていくが、パノラマ台の方から切通峠までモニタリングエリア 10 個目ということで環境調査を行うのと歩道の保護の柵というのも例年通りつけさせていただければと考えている。さらにここは利用者が、一般の方が集まりやすいところなので、利用モニタリングポイントとして 1 箇所目を使いたいなと考えている。そして切通峠からぐるっと山伏峠を越えて石割山をまわっていくという矢印のところが正規ルー

トになるが、雨天の場合は非常に危険な場所があるところではある。雨天の場合は迂回路5 の点線で石割山を登るところを迂回路として設定している。石割山の方に関しては一般利用者が多い山になるので迂回するしないに関わらず、利用影響モニタリングで、石割山の登山の駐車場になっている辺りの方にどうでしたかというお話を聞く予定。
○10 ページ：A8 の二十曲というエイドを越えて立ノ塚峠を越えて杓子山。本年降雪があって大会途中短縮というようなことになった山ではあるが、コース自体は変更なく利用しようと思っている。迂回した場合は赤点線でいく予定。矢印通り立ノ塚峠、杓子山を越えて最後に富士吉田のエイドに入っていく。ここの部分だけ今までは向原地区のロードを通っていたが、左側に明見湖という小さな湖という池がある方のトレイルを使わせてもらって富士吉田の方に出るというコースに変更。これによりロードの距離を減らしてトレイルランニング大会なのでトレイル率を増やすという想定をしている。国道を通過する距離が長くはなっているが、今回は 1 回富士吉田のエイドに入って、出たらすぐに横断という形なので、国道を走る長い距離の中で横断するような選手は基本的にはでないだろうと想定している。国道の区間が増えたが、安全上問題ないだろうと判断でコース変更させていただいる。
○11 ページ：霜山を越えて再び富士河口湖町に帰ってくるが、最後霜山から帰ってくるところのコースを、フィニッシュ会場を変更するということで、少し変更させていただいている。今まで霜山から、地図で言うと新倉河口湖トンネルという見えている文字くらいのところを下りていたが、このまま霜山の尾根を下りて富士ビューさんのカチカチ山ロープウェイという頂上駅の横を通り過ぎ、山を下り市街地を経由して河口湖総合公園に行くコースに変更を予定している。当然観光施設のカチカチ山の真横を通るので管理者の方々に承諾を取った上で運営も検討しながら進めていきたいと考えている。また下りたあとも市街地を通る区間が長くなるのでこちらも地域住民の方々へのご説明や、ご迷惑ないような運営方法で行っていきたいと考えている。
最後の利用影響モニタリングポイントとして、カチカチ山ロープウェイ山頂駅、こちらも確実に一般のお客様がいる中での選手通過になるので、利用に対してどのような影響があったかというところは新設ポイントとして進めさせていただきたいと考えている。

～質疑応答～

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「よろしいですか。一番大きなコース変更とおっしゃられた端足峠から竜が岳のコースを変更しているということでよろしいでしょうか。野鳥の方の立場から言わせていただくと、端足峠から本栖湖へ下るルートなんですけど、希少種のコノハズク、ふくろうが繁殖する場所なんです。この辺は考慮されましたか。」

＜事務局長　千葉＞
「その具体的な種に関しては考慮はしていないです。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「そこが問題なんですよ。実は 1 番最初にご説明いただいた運営計画書の中に、環境に配慮すると 3 ページに渡っていますが、この 3 ページのほぼ 90%は土壌に関すること。野鳥に関して読んでみると 20 ページの最初の方にたった 1 行。「野鳥の繁殖時期を考慮して大会開催を実施する」とこれだけなんですよ。どんな種が生息していて、どの時期に繁殖して、どんな影響があるか、どの程度かと考慮していますか。」

＜事務局長　千葉＞
「一応本年のコースに関しましては、研究所にも見ていただいて御意見をいただきまし

た。山科のモリモトさんに。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「なんとおっしゃってました？」

＜事務局長　千葉＞
「コースに関しては具体的にここはやめてもらいたいというところは特には。影響がないとは言ってませんでした。影響はもちろんあるんだけど、大きな影響というところは、今の現状のコースであればというお話はされてました。もちろん影響ないとは言ってません。誤解のないように言っておきますが。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「ちょうしゅうめんをあげて、ちょうしゅうリスクをあげて、具体的にどういうというそこまでの話はしたんですか。」

＜事務局長　千葉＞
「してないです。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「一応モリモトくんはよく知ってますので、彼と具体的な話をしたいと思います。」

＜事務局長　千葉＞
「もう一度鳥の種類だけ教えてもらっていいですか。今の希少種の種類。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「端足峠から本栖湖に下りるところはコノハズク。なになにズクとつくのはミミズクのこと。コノハ、ズク。昔からよく知られている繁殖地。かなり貴重な。」

＜事務局長　千葉＞
「このコースに変えたということはモリモトさんにはご相談していないので、そこは言っておきます。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「多分ここでコノハズクが生息しているとモリモトくん知らないと思います。彼が知っている範囲内ですとこの周辺の山ではなくて、メインの研究がルリビタキといって富士山の五合目あたりで繁殖している。ですから富士山の標高が高いところについては彼は詳しいですが、コノハズクに関しては我々野鳥の会の方が知っていると思います。彼のお墨付きだけで OK というわけにはちょっといかない部分がある。」

＜事務局長　千葉＞
「わかりました。ここの部分に関してはモリモトさんご存知ないので報告しておきます。ここに変えたということをモリモトさんにまだお伝えしてないので。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「今のことに関連するのだけど、うちの支部が前から言ってるのは、要は繁殖期にやんなきゃ済むんですよ。全部解決するんですよ。個人的には秋の開催が 1 番好ましいと思っている。去年も代わりのものが来て話をしたと思うんですが、そのときにいただいたお返事が台風の来る季節だということだったんです。今もちょうど 19 号ですか、動きが非常に心

配されていますけども、長い期間に渡る統計を念頭に考えると10月初旬中旬というのはもっとも天候が安定している時期なんですよ。今回のような例外はたぶんあると思います。それを 10 年 20 年にいっぺん起こるような例外を考慮してこの時期やめようというのはちょっと。ですから、気温や天候を考えると10月の開催は最も僕は好ましいと思う。それによって野鳥の繁殖に対する影響も 100%回避できる。そこに移行して開催するということはできないでしょうか。」

＜事務局長　千葉＞
「開催時期は大きなテーマで、喧々囂々というか、そういう形ではやってはいるんですけど私がやっている他のことも台風15号で実際に9月末にやらなくなっていたり、千葉県の我々の仲間に関しては、12 月の大会すらもできない状況です。なぜかというと台風の影響で直せない状況でできない。全部統計で調べました。どれくらい上陸しているか。理事会でやっているんですけども現実問題、2014 年 2 月に 50 年ぶりの大雪でやめてるんですね。50 年ぶりです。今回伊豆でやっている、この大会やめています。台風 15 号。関東でこんな時期に上陸するのは本当に珍しいということになっているんで。今までと、私の実感感覚でいうと、10 月の台風はだんだん珍しくなくなってきてしまっていて、今まで統計上起っていなかったことが実際起こってきている現実があるので、今の現状を見ると今ご意見があるといいんですけど、色々話はしているんですけど、ウルトラトレイルを行っていく中で大会の安全面、整備も含めて、検討をしているんですけどやるという決断になれないのが現状と言わざるを得ない。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「お気持ちはすごくわかります。ただおっしゃったように稀な例であることはある。温暖化とかあるかもしれない。そいう傾向にあるかもしれない。僕の目から見ると、それこそ杞憂というか、羹を懲りて膾を吹くという感じがしてしょうがないんですけど。やっぱり統計的な確率論から入る方が論理的だと思うんです。だから今おしゃったように台風が来るからできないっていうのは正直言って納得できない。」

＜副実行委員長　福田＞
「あと台風の影響というのは大会開催当日そのものは OK だとしても、コースが非常に広いんで台風が必ず 1 つや 2 つ 9 月に来ます。そのあとの現場復帰する作業というのは恐ろしく大変。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「そのときの被害の状況にもよりますけども、どれくらいの期間が最低必要ですか。」

＜副実行委員長　福田＞
「ひと月とかです。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「まるまる 1 ヶ月ですか。」

＜副実行委員長　福田＞
「はい。まるまる 1 か月というわけにはいかない。我々も平日すべてをそこにあてられるわけではありませんので、週末等を使ってボランティアもいっぱい集まっていただいて直すということ。毎年、今もちょうど、私自身も秋に自分で 3 個レースを開催していますので、今も台風どうなのかなと。空いている時間はひたすら山に入って整備したりする状況です。

例えば、これは自然保護とは全く関係ないことなんですけど、10 月 11 月というのは国内でさまざまなレースの非常に多い時期でございまして。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「それはちょっと理由にはならない。」

＜副実行委員長　福田＞
「はい。理由にはならないんですけど、ただ業界的に実際動かしにくいという問題もございます。それは環境面の理由にはならないんですけど。
あともうひとつが我々も秋に 2 度開催しました。9 月の第 4 週ということだったんですけどそこは 2 度続けて非常に悪天候に見舞われたこともあって、そういうこともあって秋に開催を継続するにはこのままでは厳しいかなと。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「偶然が 2 回重なったということはないですか。よっぽど強い雨男がいるとか。」

＜副実行委員長　福田＞
「そういう非科学的な話はやめましょう。ここ 5 年くらいで見ていますと、長い統計、20 年 30 年のスパンでは 10 月は台風の少ない時期だと思うですけども、ここ 5 年くらいで見ていると非常に多くなっているなという状況、気候変動ということもあって、それがどれくらい確立されたものかわかりませんけども、そうしたなかで、我々も秋にできたら 1 番いいと思っていることもあります。ただそれは非常に考えて考えて考えたなかでこの時期という結論に至ったというのはご理解いただければと思います。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「だとしたらもう少し具体的に言うと、あまりにずらすと今度は寒波の問題もあるからそうもいかないと思うけども、温暖化が進んでいるとするならば可能な限りうしろにずらしてもいいのでは。その辺も検討する価値はあるんじゃないかと思ってます。」

＜副実行委員長　福田＞
「そう思います。」

＜実行委員長　鏑木＞
「野鳥の問題もすごく大切だと思うんですけど、先ほどご挨拶を申し上げた中で、人命、選手が安全に大会を終えるということが非常に大切なことだと思うんですよ。台風があってしまって、もちろんコース整備はその後するんですけど、色んなリスクが出てくるんですけど、路肩が非常に滑って滑落してしまうとか、そういったリスクが秋は非常に多い。今回春でさえ我々はまさか雪が降ると思わなかったという状況の中、ああいった天候になってしまった。非常によめない状況なんです。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「それは台風が去った 11 月に入っての開催にすれば。同じレベルの話だと思いますよ。じゃあ、4 月に雪が降ったから止めるということはありませんよね。同じことじゃないですか。」

＜実行委員長　鏑木＞
「台風のあとというのは我々にとって非常にリカバーしにくいんですよ。大会としては安

全面としてのクオリティが下がってしまうという致命的な課題がある。そういうことも考えて秋よりも春の方が我々としてはありがたい。もちろん野鳥の件に関しては最大限に考えていきたいと思っています。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「いや、思ってませんよ。開催時期に関しても先ほどの野鳥の繁殖に考慮して、これに関してうかがった限りは、野鳥についての調査は全くやられてませんよね。」

＜事務局長　千葉＞
「はい。そうです。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「例えば法令遵守ということで言うと、この大会を開催するにことは、アセスにかかるような事例じゃあないと思いますよ。かかってないと思うんですよ。かかってないから調べなくてもいいかということではない。そうではない。例えば今回具体的な資料を用意しました。」

(配布資料に沿ってご説明)
「実は今、繁殖を終えた猛禽類、鷲や鷹など南に渡っていく、この地図でいうところの 4 ページですね。天子から熊森山、このあたりに鷹が渡ってくる。繁殖はしませんので、この時期にトレランがあったとしてもクマタカに影響はありません。その観察を行っているときに、クマタカという鳥を何度も観測しました。クマタカについてお話をしたいんですけども、イヌワシについで大きな鷹ですけども、翼を広げると 170～80cm。イヌワシとクマタカの 2 種類になります。完全な留鳥。私が観測したクマタカはすでに成鳥でした。若い鳥ではありません。この年に繁殖してでてきたのではなく成鳥でした。これは何を意味するかというとそこにクマタカの成鳥がいるということはそこでテリトリーを構えていて、そこで繁殖している可能性が極めて高いということです。私の観察したところから、あくまで推測ですが、今お渡しした地図に赤丸で中にクマタカと書いてあると思うんですね。これはあくまで推測ですよ、ここで繁殖している可能性がかなり高いということです。クマタカの繁殖期がいつかというと 2 月にはすでに番を形成する。そして 3 月には巣を作り始めます。4 月に入ると産卵して卵を温めます。抱卵し始めます。最終的に 6 月終わりから 7 月頭くらいに巣立っていくという風な流れです。そうするとこの開催時期の 4 月下旬というのは繁殖時期の比較的前期ですね。特に猛禽というのは繁殖の前期ほど敏感で非常に神経質です。どこに巣があるかわかりませんけれど、これだけの大型のタカとなると巣から 500m 以内を延々に何時間も人間が通ったらまず間違いなく放棄しますね。。その可能性が非常に高いですね。それをまず理解してください。ただしこれは先ほどから何度も言いますけど僕の推測なんです。ですから、ここに住むクマタカはどこで繁殖してどこを住みかにしてどの程度いるのか必ず調査して欲しいんです。ただしこれは法的な手段がありません。やってくださるかどうかは、こちらにかかってるわけです。あまりにも貴重な種なので今日は環境省の方も来られているので。行政課の方も来られてますよね。ぜひ行政指導と言う形で調査をするように働きかけて欲しいなと。もう少しクマタカの生態について言いますと、実はクマタカというのは稜線と低地との斜面の途中に巣を構えるんですが、比較的斜面の標高的に真ん中よりもやや低いところに巣を構える。ですから天子が岳から熊森山までの稜線を走るとクマタカの繁殖に影響がある可能性がある。絶対とは言いませんけどね。イヌワシなどの猛禽調査をやっていますので、稜線近くで繁殖した例もあります。だから一般論で言うと天子ヶ岳登山道、熊森山から下ってくるところ、あとは一般道が 1 番危険な場所。そしてもう 1 つ。今この話の発端になった、渡っていくサシ

バという鳥がいるんですけども、なぜここでサシバっていうかというと、渡ってきて繁殖に入って、産卵抱卵をする時期なんです。この開催時期にかかっちゃってるんです。もっとも危険な時期にあたっちゃってる。サシバの場合は私たちはどこで繁殖しているのか全く把握できてません。もともとサシバという鳥は里山に高密度で繁殖します。こういう山岳地で繁殖する個体も実はいるんですね。ひょっとしたらここにもいるかもしれない。で、私がいま観察したのが天子山地だけですけども、コース全体を眺めてみますと、地図でざっと見たんですが、地形的に考えると本栖湖の西側から辿ってパノラマ台付近あたりがクマタカの絶交の繁殖場所。それから最後のところになりますか、石割山とか杓子山、さらに西へ忍野村の北、あるいは東側もそこは恐らく地図を見た限りクマタカがいる可能性が高い。もしやっていただけるならぜひ調べていただいて。今ここでもって調査をやりますとは言えないでしょうが、できれば議事録が出るぐらいまでには。クマタカに関しては。」

＜実行委員長　鏑木＞
「クマタカの図というのは渡邊さんの目視みたいな感じでしょうか。」

＜＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「出現した場所はたくさんあって、鑑みてここにもいるだろうなという推測で書いています。」

＜実行委員長　鏑木＞
「事実ではない。推測ですか？」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「はい。」

＜事務局長　千葉＞
「それはしょうがない。今年確認できた場所ということで。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「はい。もっとも新しい 9 月 20 日から一昨日。」

＜実行委員長　鏑木＞
「これも 9 月 20 日ですか。ご覧になった？」」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「そういうことです。」

＜事務局長　千葉＞
「調査に関してはもう 1 回検討しますけども、昨年から今大会まで非常に複数の調査会社にもヒアリングをさせてもらって調査の関係の話もさせていただいていたんです。費用的にも非常に現実的ではないことでしたり、1 回やったからと言って効果がわからないはずなんです。たった 1 か所やってもなんの意味もないしという形でやると費用的にもどの程度のクオリティーを求めているのか私がわからない部分もあるんですが、今おっしゃっていることに関して現実的だと思いますか。おしゃっているご要望に応えられると思いますか。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「予算規模がどの程度かぼくはわからないので、具体的な数字について申し上げましょう

か。今申し上げた天子山塊だけでなく、決まった点に観察者を定点に配置するわけです。1 つの番いに関して最低２人。もしこれが僕の推測どおり 5 番いで 1 つの番いに２人人間を配置したとしすると基本的には 2 月から 7 月まで。1 回の調査に最低 3 日間。合計 30 人分。日当などを考慮すると交通費や宿泊費、月に 1 回の調査でおそらく 150 万円。それが 6 か月で 1000 万単位になってしまう。」

＜事務局長　千葉＞
「同じような結果をすでに私は聞いていまして、それを 1 回ではなく何年間もやらないといけない。実際は判断はできないという話。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「それは繁殖する場所がそう簡単に見つかるわけじゃないんですよ。巣が見つかるとある程度結果が出るんです。10 年やって巣が見つからないとかある。だから調査会社はそのことを言っていると思うんですよ。1 年で済みませんよというのは。ただ危険度が高い天子が岳、熊森山とともにここは間違いなく繁殖しています。
この 2 箇所だけに絞っています。その他の場所は比較的少ないだろうと。」

＜事務局長　千葉＞
「私、第 1 回目はいなかったですけど、大会の設立当初からこの懸念をずっとお話しされているというのは認識してまして、今回 8 回目になって 2019 年の状況でクマタカを見つけられているということなんですけども、 肌感覚で構わないのですが、組織の見解ではなくて私個人の見解ですが、私の感覚として、もう 8 回やっているわけですが減ってると思われますか？」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「成鳥を見ているだけなものですから、成長の寿命を考えるとその間にその鳥が死んでしまうという可能性は極めて低いのでこれはなんとも言えません。今回観察したなかで今年繁殖に成功して生まれた幼鳥は一羽も見ていません。それはただ単に確認できないだけなのか、すべての繁殖に失敗して見えていないのかこれは判断できません。もし後者の方で繁殖に失敗して確認できないとすると、ひょっとすると影響があったのかもしれません。これもなんとも言えません。」

＜事務局長　千葉＞
「わかりました。我々も国際的なレースに所属していまして年に 1 回今年もシャモニーで会議をしているんです。それこそヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、南米、まさにパタゴニアのようなところでもレースをやっていまして、色んなテーマで話し合いをするんですけども、野鳥の問題で開催が非常に問題になっているという例が UTMF だけなんです。野鳥が豊かなところでやっていることだとは思うんですけども、具体的な方法論や調査もしていないので、具体的な対応策が取れていないというところは非常に申し訳ないなと思いつつも、色々と我々も手を尽くしているんですけども何が 1 番いいのかなと。事例とかを聞いてもなかなかないものですから、申し訳ございません。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「ほかの海外の大会がどういう環境のもと行われているのかわかりませんが、非常に高山でやっているのか、高山でやっないのとではまったく異なる。おそらくウルトラマウントフジのコースは、ほかのレースと比べると圧倒的に多様な生物が生息する環境でやってい

るということです。」

＜事務局長　千葉＞
「わかりました。この件で何か他の方のご意見等があれば。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「回答をできれば早めに。実際は調査をもしやるとなると、その結果が反映されるのが来年の大会ではなくさらに翌年以降。始めるのでしたらできるだけ結論を早めに。」

＜実行委員長　鏑木＞
「渡邊さんがおっしゃっていた調査は 1 年に 1000 万とかかかるわけですけども、これは我々のポリシーとしてしっかりと自然環境と共存していくという意味でやらなければならない部分もあるのかもしれませんけども、正直我々のは大きな大会ではない。これだけの負担をかけると非常に大会のクオリティ、さっき言った安全面のクオリティが下がってしまいます。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「調査に予算を割かなければならないことによって、そのクオリティが下がると。」

＜実行委員長　鏑木＞
「確かに先ほどおっしゃられたようにピンポイントでやるとかあると思うんですけど、予算規模が大きな大会と思われているとしたら誤解です。限られた金額の中でやっている。ランナー規模で 2400 人、大きな大会ではないです。他の色んなランニング大会 1 万人規模の大会に比べれば。その中で年間 1000 万という金額を割くのはそうとうな覚悟がいります。正直なことを申し上げて非常に厳しい。そこをご理解いただきたいなというのはあります。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「基本的に予算規模というのはどういうとこなの。参加費、それともスポンサーを募る？」

＜実行委員長　鏑木＞
「収入面で言えばその二つが大きなところです。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「現状ではその 2 つを増やすというところは難しいところなんですか。」

＜実行委員長　鏑木＞
「難しいと思います。今 1 人 36000 円ですので、2400 人 500 人という人数でやって欲しい、継続して欲しいというなかでの運営ですので、そうすると 1 人の負担を 36000 円をもっと上げなきゃいけないとか、あるいは大きな協賛を得なくてはいけない。そういった部分が出てくる。現実的には非常に難しいのが現状でございます。」

＜富士山エコレンジャー　吉永　様＞
「鏑木さん、よくわかってないんだけど、僕が思いますのは地方自治体が主催者に入っているでしょ。地方自治体っていうのはこういうのにお金は出してくれんのですか。」

＜実行委員長　鏑木＞
「もちろん一部補助金として出していただいているところもございます。ただ大会全体を

を大きく運営できるようなお金ではない。あくまでも補助という形でいただいているものですから。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「この集まりは我々の意見を聴いて、日にちを変えたり、やめたりすることは、前提ではあるんですか。」

＜事務局長　千葉＞
「ありますよ。だからコースを変えたりですとか日程を 9 月にずらしたことがある。聞かないありきでやっているつもりではないし、実際に毎回コースも変わってますし、環境調査も我々なりにはやっています。もちろん聞かない前提では一切ないです。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「渡邉さんがおっしゃったことを前提にコースを変えたり、日にちを変えたりする可能性はあるんですか。」

＜事務局長　千葉＞
「野鳥の件に関しましては同様の意見は初回からいただいてまして、色々と検討していまして、9 月に移動したのは野鳥の影響が大きいところだったと思うんですけども、100 年に 1 回のことかもしれません。我々2 回連続うまい天候には合わなかったところもあって、もう 1 回変更したところもありますので、今野鳥の会さんのことに関しては結果としてご要望に応えられてないということが現実的にはありますけど、検討は常にしています。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「検討だけされても、それで調査をまったくされてませんよね。私がお願いした調査はお金がかからないと思うんですけど、我が家に来ればコースから数百メートルのところに住んでます。そこはちょうど繁殖地になっている。それを見れば繁殖地だったいうことをわかるということを 3 年か 4 年渡って私は言っているはずなんですけど、一切来ることがなく、今年 7 月に電話をいただいて、今から見にいくって今はもう 7 月じゃんかって言ったんですけど、とっても良心的な方で。」

＜事務局長　千葉＞
「中尾のことですか？」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「確かそんな名前だったと思います。でも、何考えてんですか。今来たってしょうがないでしょ。我々のことを考えていないんだ。ご理解ください。理解しました。その時期にたくさんのランナーが走って死んでいく雛たちに、理解して死んでいって私は言うしかない。それから、全然変えるのもないのに私が来ても無駄ですよね。ここに来て嫌味を言うだけだから。そういうもんなんですね。そう思えばいいんですか、私は。平日ですよ。仕事してんですよ。仕事しないでくるんですよ。そんなことになってんの、この会って。」

＜副実行委員長　福田＞
「いや、そんなことはないつもりですし、半場さんに毎年毎回ご指摘いただいてるアツモリソウを何とかしてくれと、それに関しては今年も昨年も半場さんに現場まで御足労いただきまして、アツモリソウが生えるところをランナーが絶対に入らないようにと対策は取りました。例えば言われたことが全部実現できるわけではないかもしれませんけど、すこ

しでも変えていけることは変えていきたいし、引き続き色々ご指導いただければとそう思ってます。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「野鳥のことはずっと言ってたんですが、環境省から言われましたから当然案内します。私の仕事ですから。野鳥のことは全然。簡単にくればいいことなのに、一切見ないで、見ても無駄ですよね。変える気がないんだったら。現状。」

＜副実行委員長　福田＞
「いや、そんなことはない。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「じゃあ、なんでやってくれないんですか。毎年言ってたのに。貴重な野鳥その他、大事な野鳥いますよね、それは環境省でもなんでも皆さん守ろうとしてくれてんですけど、普通公園利用者やハイカーさんがが楽しめる鳥というのは日常普通にいる鳥です。ヤマガラとかその仲間の鳥ですね。その鳥たちのことは一切環境省もタッチしないって言っているわけですよ。でもね、自然を守ろうと思ったら砂漠の中にアツモリソウと貴重なオオタカがいるっていうだけじゃダメなんですよ。全体なんですよ。そのことが言いたかったんです。繁殖期かどうか、繁殖期に走っているわけですよね。」

＜事務局長　千葉＞
「はい、そうです。それは認識しています。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「それを変えられないっているのはよく理解できない。その理由を言われても私たちランナーじゃないんでわかりませんよね。あと熊のことが書いてありましたね。20 ページでしたか。」

＜事務局長　千葉＞
「ツキノワグマ生息地区、はい。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「これは安全管理を図るってどんな感じ。」

＜事務局長　千葉＞
「事前にコースに行って爆竹鳴らしたりとかしてます。選手が来る前に。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「全然効果ないですね。ここのコース上で明神山で 2 回、それから石割山で親子熊 1 回、大平山でも 2 頭の子熊を連れた熊が今でもウロウロしています。その場合爆竹を鳴らしても、この長い期ずっとやってんですか。通過前にやって終わりですか。」

＜事務局長　千葉＞
「はい。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「次の日は？」

＜事務局長　千葉＞
「やらないですね。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「その日の朝だか夜だかやって。」

＜事務局長　千葉＞
「選手の通過前にかけてやります。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「全然効果ないですよ。」

＜実行委員長　鏑木＞
「熊は私も何回か山で会っているんですけど、仰るとおりなんですね、1 回鳴らしても寄ってくる。山の安全管理として爆竹を鳴らすのはあり、選手の方で積極的に音をこう破裂音を（手を打って）鳴らすことによって。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「ずっと叩きながら？」

＜実行委員長　鏑木＞
「危ないところでやったりとか。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「危ないところってどうしてわかるんですか？」

＜実行委員長　鏑木＞
「それは、多くの選手が通るところなので。走っていて危ないところはわかるんですよ、なんとなく。そういうところで破裂音を出すっていうのを。ずっと叩いているのは難しいと思うんですけど、この音が 1 人の選手がやる。2 千何百人と通りますので。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「やってます？」

＜実行委員長　鏑木＞
「毎年言ってますので。特に熊の出没情報はあった場合は、我々即座に選手の携帯の方に情報を送りますので、その地点では特には。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「すごい増えていますよ、今。」

＜実行委員長　鏑木＞
「そこは留意しながら。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「山の方に増えて、今下に降りてくる熊が多いんですよ。だから目撃情報というのはあまりあてにならないですよ。注意するってどうするのかな。たまに手を叩くって熊を追い払うって、なんかちょっと笑えてきたんですけど。」

＜副実行委員長　福田＞
「例えばですね、レース開催していて選手がそれなりの間隔で走り続けてきます。現実的に国内でトレイルレースやっていてレース中に選手が熊に襲われたっていう事例は今のところないです。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「そうですね。」

＜副実行委員長　福田＞
「私はそれこそ熊は7、8回は山で遭遇しています。１人の時です。全部会ったのは。複数の人間がいてとか、レース開催中に走っていてあってしまうのはない。これは私は根拠はないですよ、熊になったわけではないですから、ただ開催前にどこのレースも爆竹を鳴らすなり空包を撃つなりして、そのあとに選手がバァーッと通る。選手が 3 時間も 4 時間も通らないことがあればまた別の熊が来るかもしれませんけど、通り続けているあいだは来ないなというのはなんとなく認識としてはあります。それ以上のことはわからないですけど。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「すぐそばで隠れていて、安心したところでまた選手が来たりとかそういう怖い雰囲気はわかっているんで熊の生態として。なんか人が来たって藪に隠れて、そこに向かって道があればそこを走っていってそこの近くまで行って、熊がそのまま逃げてくれたらいいですけど、そうじゃない例を、経験者もやられているんですよ。そんなこともありますんで、気楽に書かれても。」

＜副実行委員長　福田＞
「気楽に書いているつもりはないです。できるだけ対策はしているつもりですが。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「そうですか。」

＜事務局長　千葉＞
「トレイルランニングはそもそもリスクを 0 にすることはできません。海外ではグリズリーに殺されているトレイルランナーもいますし、ピューマに食い殺されているトレイルランナーとかもあります。でも、自然の中を走るものですからそれは裏を返せば逆に豊かな生態系でやっているということで、もちろんないような対策ではしていくですけども、100%の安全が確保できるかって話になったら、なかなかお答えできない部分はあるので、我々は危険動物がいるということを認識して参加者にそれをお伝えして、熊鈴が本当に有用かどうか議論も実際あります、色々ご意見もあると思いますが、ありながらも現状は今できる安全ということでやりながら参加者の方々と話し合いをしています。もちろん熊が出たら危なかったらやるべきではないという話というのが日本全体のお話であるということであればそれはもちろん開催という形にはできなくなる可能性はもちろんあるとは思ってますけども、そこはうまく我々もアウトドアのスポーツをやっていく人間なのでうまく接しながら努力はしていきたいなと。今後ともご指導をよろしくお願いします。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「渡邊さんが言われた調査はほとんどできそうにない。」

＜事務局長　千葉＞
「もう 1 回検討はさせいただきますけども去年に半年くらい色々な方と話をしたなかだと、なかなか難しいというところは 1 回出ています。もう 1 回理事と話をさせていただきます。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「ということは来年の春のためにはできないということ。」

＜事務局長　千葉＞
「ですから、去年の結果はありますけど、もう 1 回お話をさせていただきます。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「ということは来年はもうやることは決まっちゃってるんですね。日にちも全部。」

＜事務局長　千葉＞
「はい。今決めています。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「それでもう動かし難いわけですね。」

＜事務局長　千葉＞
「大きなことがなければ。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「大きなことじゃないということですね。」

＜事務局長　千葉＞
「大きなことだとは思っていますけども。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「私たちが言っていることで、変えることはありますか？」

＜事務局長　千葉＞
「だからありますと先程から言っている。あります。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「間に合わないじゃないですか。見に来ないんだから。」

＜事務局長　千葉＞
「それは半場さんのお宅にということですか。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「簡単でお金もかかんないよ。簡単に見に来れるところに気もしないじゃない、あなた方は。毎回言っていますよ。すごい怠慢じゃないですか。」

＜事務局長　千葉＞
「なるほど。ご意見として頂いておきます。議事録に残して頂いて。そいうご意見があったということで。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「今までそうだったんですけど、今回は違うんですか？」

＜事務局長　千葉＞
「半場さんのところにお伺いすることが環境面で有益かどうかということも含めてお話しするようにしますんで、ちょっとお時間いただけますか。今の話でしっかり。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「来年の大会に間に合わないけどね。7 月ぐらいになってから見させてくれって電話かかってきたって。」

＜事務局長　千葉＞
「そこは中尾から聞いてまして、そこに関しては申し訳なかったなと。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「全然考えてないということなんですよ。」

＜事務局長　千葉＞
「そこは聞いておりますので、この場を借りてお詫び申し上げます。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「では、来年死んでいく雛たちに彼らが走るのを楽しむために静かに死んでいってくれって伝えるしかないんですね？」

＜事務局長　千葉＞
「そういうご意見ということをお伺いしておきます。なんて言っていいかがわかりませんので。今そういうお話をいただいたことは肝に銘じておきます。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「今の半場さんの話で思ったのは、7 月に見に行ったって、はっきり言って、野鳥の生態について全く知識がないということなんですよ。調査ができるほどの知識を持てとはいいませんが、少なくともトレランを開催するということが影響があるかの必要最低限の基本的な知識だけは持って欲しいんです。勉強して欲しいんです。それと先ほど申し上げた調査の予算的には非常に厳しいということですが、より現実的な話をすれば稜線に上っていく天子が岳の東側、逆に下っていく熊森山からのそこだけに絞って調査すれば予算的にも1／3ぐらいでできますよ。そういう現実的な選択も考えて検討してください。 忍野村の方にもそういう環境がある。あのへんでもって稜線に登っていくようなあるいは下っていくような場所っていうのはどうしてもクマタカの繁殖している場所がある。そういう場所を必ず選んで調査する方向でやってくれればいいんじゃないですか。」

＜事務局長　千葉＞
「はい。わかりました。私も知識がないですが、もしそのような調査とかをやられて事例とか、スポーツ他の大会の、トレランじゃなくても、普通に考えて 1500 万を野鳥の調査だけにかけるというのは、国の道路調査とか環境調査とかは置いておいて、なかなか現実的ではないというところがあって、我々は日本を代表するレースをやっておりまして、お金をかけたからやったということころがスタンダードになってしまうと、実際にできない

ところはたくさんあると思うんで、そういった部分もあって、うまい形で、例えば野鳥の会さんの方がある程度調査を協力して金額もかかるし、そういうことってできるんですか？」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「それは我々野鳥の会で調査やるのは極めて非現実的ですね。というのは、基本的技術的に無理。調査をするだけの技能を持った人間が我々の中に何人いるか。とても無理です。皆さんが思ってらっしゃるほど野鳥の会の人間は野鳥の生態に関して成熟している人が極めて少ないです。我々が調査するのはちょっと無理です。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「簡単にできることもやらないんじゃない。」

＜事務局長　千葉＞
「そこは真摯に受けております。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「本当に真摯に受け止めてます？何年もそれを無視されてるんですよ。」

＜事務局長　千葉＞
「わかりました。他に意見ございますか。この件に関してでもいいですし、それ以外についてでも。意見交換の場ですので、本当に広くあれば。」

＜静岡県くらし・環境部環境局　自然保護課　山上　様＞
「2 つあるんですけど、先ほどの渡邊さんの意見で、500 名走っただけで鳥に影響があると、私は鳥類専門外なのですけど、ウルトラトレイル 2400 人小規模というお話は返答の理由にならないので、もうちょっと歩み寄っていただけるといいかなと思っています。
確認なんですけど、迂回路をいくつか設定していると思うんですけど、最初から迂回路の方を、色々理由があって迂回路があると思うんですが、雨天とか。雨天の連絡体制とかもあるとは思うんですが、最初から迂回路の方を使わない理由というのは、自然の中を走りたいからという理由ですか。」

＜事務局長　千葉＞
「それは後者の初めから迂回路を走らないのかという話は他の大会で横に道路があるから全部道路を走ればというのは、水泳を走ってやればいいじゃんというのと一緒くらいの受け止め方です。要するに、我々にとってはトレイルランニングということは不整地を走るということに関しては、皆さんには理解できないかもしれませんが、並々ならぬ拘りがありまして、道路を走ればいいじゃんという話になっちゃうとそれは単なるロードのものになってしまうんですね。なるべくできることならば、色んなことの制約が許される限り不整地、環境がいいところで走りたいと思っている人間なんだと思って頂いて。なかなか理解できないかもしれないですけど、我々も同じ国民なので、アウトドア、自然環境でトレランで使いたいという人間は少なくてもいるということを思っていただけるとありがといなというところで。我々はあくまでも鏑木とか福田とかが勝手に言っているわけではなくて、かなりの数が実際います。数十万人という人間が、少なくない数がトレイルランニングやられてますので、一定数日本の国民の中にはいますし、世界中にはすごくたくさんいるということを認識していただけると有り難いというところがあります。迂回する理由と

いうのは現状で言うと、雨というところの安全面と土壌が崩壊するという可能性があり設定しています。
何らかの状況で野生動物に影響があるというところで今のところ迂回にはなっていない。」

＜富士山エコレンジャー　吉永　様＞
「誤解があるけど、土壌調査と言ってるのは周りの植生を守るためにやってんの。」

＜事務局長　千葉＞
「連絡体制に関しましては、実行委員会で連絡体制を取っているのと、選手に対しても緊急時も含めて、複数の連絡手段で日本語英語中国語、3 カ国語で安心できる体制を取らさせて頂いてます。」

＜静岡県くらし・環境部環境局　自然保護課　山上　様＞
「質問の意図が変な風に伝わったかもしれないのですけど、トレイルランニングをする人たちを否定する気持ちは全くなくて、ただ単純に迂回路を設定した理由と使わない理由を聞いただけです。不整地？ボコボコしているようなところですよね。自然保護サイドなんかは意見交換で。例えば 10 ページの迂回路が山の中から山の中へ変わってるんですけど。」

＜副実行委員長　福田＞
「これに関しましては、両方とも山の中なんですが、ここは非常に滑りやすい。本来のコースの方は下りルートなんで雨が降ると非常に滑りやすい。迂回ルートの方は赤い波線の中で 70%は林道なんです。山の中を通過しても。雨が降った場合は危険なところがあるんでこちらの林道の方を通っていただくと。そのためです。」

＜静岡県くらし・環境部環境局　自然保護課　山上　様＞
「わかりました。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「この会議というのは密室の会議なんですか。それとも公開されているんですか。」
たぶん議事録が出されると思うんですけど、それをホームページに公開するといことは可能ですか。」

＜事務局長　千葉＞
「逆に皆さんいかがですかと聞きたいですね。行政の方々もいらっしゃいますんで、密室にすればこそぶっちゃけた話ができているのかなと思います。我々は別に構わないですけども、逆に皆さんがそれで宜しければ、我々は別に構わないかなと思います。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「少なくとも私が質問したことについての実行委員会からの回答に関してはなんとかして公にしたいと思っているんですが。」

＜事務局長　千葉＞
「もちろん。作成されているホームページにいつもどおり発表していただいてかまわないです。一般公開に関しては我々実行委員会サイドは構わないんですけど、行政の方々もいらっしゃるんでそこは検討させていただくというか。いいですかね。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「じゃあ、限定的に私が質問したことに対する答えを。」

＜事務局長　千葉＞
「それをこういう話だったという話はいいですし、我々議事録でこうだったというところは別にかまわないと思います。我々の見解に関しては。」

＜環境省　希少野生動植物種保存推進員　半場　様＞
「私たちの野鳥に関する意見を言ってもらうことはできないですか。」

＜事務局長　千葉＞
「こういう意見がありましたというところですか。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「そうですね。」

＜事務局長　千葉＞
「それは検討しましょうか。説明会を開いてこういう趣旨のお話をしたという。はい。それは検討します。こういう意見をいただきましたみたいなかたちですよね。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「環境に関する意見もありましたんで。」

＜事務局長　千葉＞
「環境調査の報告書しかなくて、説明会でこういう話がありましたこういうふうになりましたというのは確かになかったのでそれは早々に。」

＜野鳥の会　南富士支部　富士副支部長　保護部　渡邉　様＞
「ぜひお願いします。」

＜実行委員長　鏑木＞
「環境面ばかりでしたが、警察の方は大丈夫ですか。」

＜富士吉田警察署　交通課　星野　様＞
「安全対策はしていただいてるようなので。信号機は守るということですよね。」

＜事務局長　千葉＞
「はい。そうです。」

＜富士吉田警察署　交通課　星野　様＞
「基本ルールにある「日本国内にある自治体の法令」部分と捉えて、できるだけ信号機は守ってくださいという。それを守っていただければ。」

＜事務局長　千葉＞
「あえて法令という言葉に変えています。」

＜静岡県くらし・環境部環境局　山上　様＞
「大会概要の最初に説明した方のやつなんですけど、トレイルから外れることを禁止しますというのは自然保護以外にこの外れちゃ行けない理由とかって書いてあるんですか。」

＜事務局長　千葉＞
「これ以上のことは書いてないです。」

＜静岡県くらし・環境部環境局　山上　様＞
「植生のため外来種子の持ち込みを防ぐためにマットとかで足元を拭いたりとかすると思うんですけど、その時に払った土砂とか土を飛散しないように気をつけていただけると。」

＜事務局長　千葉＞
「わかりました。泥とか種子に関して別途処理をしていますということですよね。」

＜静岡県くらし・環境部環境局　山上　様＞
「縛ってですね。」

＜事務局長　千葉＞
「はい。わかりました。」

＜環境省　沼津管理官事務所　成田　様＞
「開始時間を 3 時間遅らせたということで、夜間の通行に変わってくるわけですけども、その辺の安全面とかトレイルを踏み外したりとかルートを外れることに繋がると思うんですけど、そういうことの検討というか何かされているんですか。」

＜事務局長　千葉＞
「過去にも 3 時スタートあったので、我々も経験ありますので、そこは大丈夫です。」

＜環境省　沼津管理官事務所　成田　様＞
「そんなに影響はない？」

＜事務局長　千葉＞
「はい。」

＜副実行委員長　福田＞
「本日はお忙しい中、お集まりいただきまして貴重な意見たくさんありがとうございました。できることとできないことがございますので、すぐ結果がでてやるというわけではございませんけど、しっかりと全部受け止めて安全に、選手の生命だったり環境面だったり、十分に安全なレースとして、世界に誇れるレースとしてやっていきたいと思いますのでぜひご指導もご意見もよろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。」

以上

議事録作成
ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会
事務局　秋本康晴

○経過報告
・野鳥の調査について
【10 月 23 日現在】　3 社に調査依頼をしたが、「既に別の猛禽類の調査が数件入っていることにより、新しい調査が難しいこと」、「小さな団体なので対応が難しいこと」等の理由により、2 社より実施不可の返答。1 社見積もりを頂き、調整中。